

103歳になってわかったこと

——篠田 桃紅——

7/30/2015

北村社会福祉士事務所

代表 北村弘之

最近、映像を通して「篠田桃紅」さんの生きざま、そしてその美術に触れました。

タイトルにあります、本(幻冬舎出版)を読み、感銘を受けましたので、その一部をご紹介します。

私の感想として、ご自分の生き方が家庭環境にあったとは言え、「自分らしさ」を追求した人生を送られたという感じを受けました。この本にある言葉はどれをとっても、人生そのものをあらわしており、特に、「自然の一部として生まれてきただけ、と思えば気負いがなくなる」は私の参考になるものでした。

墨の美しさに17歳ではじめて触れてから、30代で、既成の書のかたちにとらわれない墨による抽象画を確立。万国博覧会の日本パビリオンへの出品等で日本代表として活躍、戦後すぐに単身渡米、舞台は世界へ。1956年以降アメリカ・ヨーロッパで数多くの個展を開催、瞬く間に高い評価を受け、現在まで日本国内のみならず世界でも第一線をおこなってきた。(文書と写真はギャラリー桜の木 HP より引用させていただきました)



【私には死生観がありません】

人の領域でないことに、思いをめぐらせても真理に近づくことはできません。それなら私は一切を考えず、毎日を自然体で生きるように心がけています。

【古代の「人」は一人で立っていた】

漢字の「人」は、人はひとりでは生きられない、お互いに支え合っているものだから、二本の線が支え合っている、と言います。しかし、古来の甲骨文字を見ますと、「人」という字は、一人で立っています。一人で立っている「イ」(注:実際には違う)は横向きになって、両を前に出して、何かをはじめようとしているように見えます。あるいは、手を差し出して、人を助けようとしているのかも知れません。いずれにせよ、二本の線が支え合わないと成り立たない「人」とは違い、相手への過度な依存はしていません。

【“いつ死んでもいい”は本当か】

「いつ死んでもいい」と自分自身に言い聞かせているだけで、生きている限り人生は未完だと思います。

【自然の一部として生まれてきただけ、と思えば気負いがなくなる】

(少しずつ自信をつけて人はようやく生きている)

【どうしたら死は怖くなくなるのか】

先日、「どうしたら死は怖くなくなるのか」と若い友人に尋ねられました。私は「考えることをやめれば、怖くなくなる」と助言しました。どうせ、死はいつか訪れると決まっています。そう遠からず、私も死ぬだろうと、漠然とですが、思っています。人は老いて、日常が「無」の境地にも至り、やがて、ほんとうの「無」を迎える。それが死である、そう感じるようになりました。

【夢中になれるものが見つければ、人は生きていて救われる】

(頭で納得しよう、割り切ろうとするのは思い上がり)

【受け入れられるか、認められるかよりも行動したことに意義がある。】

(人の成功を見届けてからの、あと出しじゃんけんではつまらない)

【予定や目標にとらわれると、ほかが見えなくなる。ときには、その日の風まかせにする】

【何となく過ごす。なんとなくお金を遣う。無駄には、次のなにかが兆している。】

(必要なものだけを買っていても、お金は生きてこない)

【幸福になれるかは、この程度でちょうどいい、と思えるかどうかにある。】

(いいことづくめの人はいない、一生もない)

【養分を吸収して支えるのは、自分という根っこ。】

(私が今までに触れたすべてでできている)

【知識に加えて、感覚も磨けばものごとの真価に近づく】

(虫が知らせる、虫が好かない、を大切にする)

【人との競争で生き抜くのではなく、人を愛するから生きる】

(地球上から、戦争と飢餓がなくなることを願う)

【懐かしい人との時間は、鮮明に生き続けている】

(思い出の物が、昔と今をつなげてくれる)

【運命の前では、いかなる人も無力。だから、いつも謙虚でいる】

(どんなに愛する人でも、いつ奪われるかわからない)

【時宜に適って、人は人に巡り合い、金の言葉に出逢う】

(医者「治りますよ」で、私は死病から生還した)

【人生は山あり谷あり。ようやく平地を得たとき、感謝して大事にする】

(どんな斜面にも、つかのま安心できる場所がある)

以上